本紙は女性による平和と平等を推進します

回覧

発行所
㈱全国婦人新聞社
〒160 本社　東京都新宿区西新宿3-7-28　宝幸西新宿ビル
電話 03(343)1846代表
振替口座　東京 172320
〒543 支社　大阪市天王寺区勝山2-14-6-8
電話 06(771)7415代表

全国婦人新聞

ご購読料
1年　3,800円
(郵送料とも)
現金・切手・振替で前納
(月3回発行)
10日・20日・30日

うすくちは心もち　控えめにお使いください
東
ヒガシマル醤油
＊醸造元＝兵庫県竜野市　ヒガシマル醤油株式会社

第三回反戦マラソン演説会

草の根が次々登壇

外国婦人も、延々8時間

〝終戦の日〟恒例となった、戦争への道を許さない女たちの連絡会の「反戦マラソン演説会」が、今年で三回目となった。

ことしはちょうど日曜日となった十四日だったが、台風の影響で時折激しい雨の降る中を、傘をさしての八時間の演説会だった。

有名文化人より無名の地域での活動家たちが多く語ったこと、また、原水禁大会に来日した米、英、ベラウの女性たちも登壇するなど、ムード的なものから実質へ、そしてさらに幅広い広がりが感じられた。あいもかわらず馬耳東風の若者たち、チラシを受け取ることも拒否する光景も多く見られた。一方、雨の中をじっと立ちつくして聞く人も…。その中で壇上にたった人々は、情勢は極めて悪い、女たちの力で流れをかえよう、と力強く訴えた。

午前十時、演説会はスタート。総合司会は三年連続の吉武輝子さん。トップバッターの評論家十返千鶴子さんは、与謝野晶子の歌〝君死にたまふことなかれ〟をひいて反戦の訴えを。ついで婦人有権者同盟の紀平悌子さんが「昨年、国連で各国大使に反核署名の報告をしたとき、大切なのは、あなたの政府が何をやっているのか、といわれ返事に困った」という話を披露、語気を強めて「戦前、女は一票を持っていなかった。だから仕方なかった。知らなかったといえるかもしれないが、もうそんなことはいえない。婦人の一票を大事に、いい選択をしよう……」

外国の人びとがたくさん演壇に立ったのも特徴。ベラウのキヨコ・テゲラクさんは、日本が放射性廃棄物をミクロネシアの海に捨てようとしている事実を訴え「もし、日本が本当にこれらの廃棄物を安全というのなら、東京湾に捨てるべきだ」と鋭くいう。イギリスの反基地活動家・レベッカ・ジョンソンさんは、非暴力で平和をかちとることを力強く主張する。

午後から壇上にたったアメリカのエディス・ディヴィソンさんは「こんなところに立ったのは生まれて初めて……」という地味な活動家。朝から渋谷駅頭で演説会を聞き、メモをとっているところをみて、連絡会のメンバーに何か話してほしいと頼みこまれての登場。静かな口調で、世界中の女性が力を合わせて平和を守ろうと語る…。

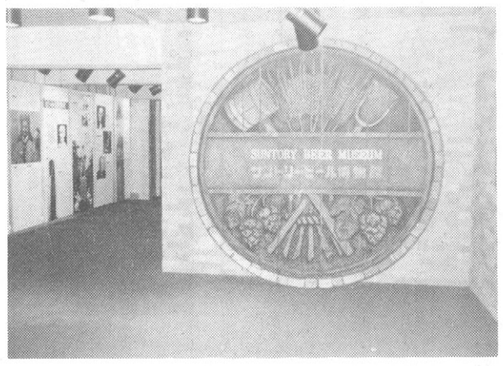
こうして午後五時まで、雨にもめげず、約六十人の女性がかわるがわる、休日の街を行く人々に、反戦を呼びかけた。

語りかけるアメリカのディヴィソンさん

雨の中で話しあいがはじまる

身近かで楽しめる場

ビール博物館（府中）



縁側からにおう蚊取線香のにおい。うちわを片手に観戦するプロ野球のTV中継。そしてゆでたての枝豆を肴に、冷えたビールをググーッとあおる……。

ビールが、ノドを過ぎる冷たい感触は、真夏の暑い時には欠かせない清涼剤だ。

ビールが、日本で本格的につくり始められたのは、およそ一〇〇年前。以来、多くの人々に親しまれ、愛され、今では老若男女を問わず、多くの人たちが飲むようになった。

種類も、容器も豊富になって、人々はどこあたり前のようにして、ビールを買い求め、飲んでいる。

だが、このビールが、いったいどのようにしてつくられているのか、知っている人はとれぐらいいるのだろう。

ビールが、麦とホップを原料にしていることは、多くの人に知られるところだが、一口に〝麦〟と言っても、いろいろな種類がある。

〝ホップ〟だって、そう簡単にお目にかかれる植物じゃない。

こうした、ビールに関する謎解きをしてくれるところが、サントリーの武蔵野ブルワリー内にある「ビール博物館」だ。

同博物館のテーマは「ビールづくり史」と「ビール博物史」。中世のビールづくりを表わした模型や、パネル展示、珍しいジョッキの展示などで、ビールに関することが、要領よくまとめられている。

ビールのナゾ解明

製造工程を見たあとで

同博物館は、一般に、〝博物館〟と言われるものとは、いささか趣向が異なる。言って見れば、ビール工場内で、ビールの製造工程を実際に見学した後の、〝確認〟の場といった趣き。

製麦、仕込、発酵、貯酒の工程をまのあたりにして、いざ、博物館へ、といった具合。

正面、左手には、昭和五十年まで、実際に使われていた、木製の樽が積みあげられている。

歴史を示したパネルには、ビールの誕生が、紀元前四〇〇〇年のころとされている。

中世のビール工場を再現した模型。そして、昔のジョッキいろいろ。

十九世紀のドイツのジョッキには、がいこつの型どったものもある。これは、頭のよい人に自分もあやかろうというもの。

ふたつきのジョッキはよく見かけるが、十九世紀のチェコスロバキアのジョッキは、ふたつきでも、これは飾り。底の方が入口になっているから、全部飲んでしまうまでは、ジョッキを置くことができない、という、ややこしいものもある。

ここには、実物の二条大麦と乾燥したホップも展示されており、実際に手でさわることもできる。

博物館のあとは、濾過、びん詰・樽詰め工程へと向う。だから、ビール博物館は、工場見学の一環というわけだ。

同ブルワリーは、サントリーが、保持するビール工場の中で、最も歴史が古いところだ。今年、二十年目を迎え、ビールの製造工程を知ってもらおうと始めた工場見学も、同じ年月を数える。

今では、年間、五〇〇〇人もの人がここを訪れ、小学生たちが、学校の社会見学の場として利用することも多いという。

博物館を含め、武蔵野ブルワリーの見学は無料。事前に予約すれば、誰でも見学できる。

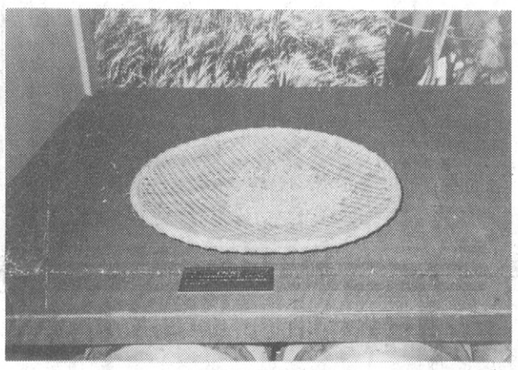
「武蔵野ブルワリー」東京都府中市矢崎町三一☎〇四二三一六四一二三一一〇。

▽交通：京王線府中駅下車・国鉄・南武線府中本町下車。

▽入場：無料（予約が必要）

ビールと世界の歴史のかかわり方をパネル展示

サントリービールのできるまで


原料の二条大麦

〝平等法〟を考えよう

行動を起す女たちの会

「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」では、九月十七日（土）、東京・お茶の水の総評会館で、学習・討論会を開く。

テーマは「パートⅡ――世界の女性解放　各国の平等法の役割と効力は？　私たちの雇用平等法をつくるために――」。

欧米諸国では、ここ十数年間に、雇用上の性差別をなくすための法律――「男女雇用平等法」が、次々と制定され、女性たちの大きな力になっていると言われている。

欧米各国での同法律が、女性解放といったい、どのような役割を果しているのか、来年にも国会に上程されようとしている、日本の「男女雇用平等法」とはどのような内容のものなのか、各国の様子を知りながら、役に立つ「平等法」のあり方について考えようというもの。

当日は、「雇用平等法には、なにが必要か」について、弁護士の中島通子さんからの報告。「フランスの男女職業平等法」については、日仏女性資料センターの林端校さん、「スウェーデンの情報」については、ビヤネール多美子さん（予定）が、「アメリカの女たちは今」をテーマに、都立高校教員の三井マリ子さんらが、それぞれ講演を行う。

日時…九月十七日（土）午後六時（受付開始）～九時。

場所…総評会館（地下鉄・千代田線新お茶の水駅下車）。

参加費…五〇〇円。

「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」〒一二六〇東京都新宿区荒木町三三中沢ビル三F「ジョキ内」☎〇三一三五七一九五六五。

喫煙と健康世界会議

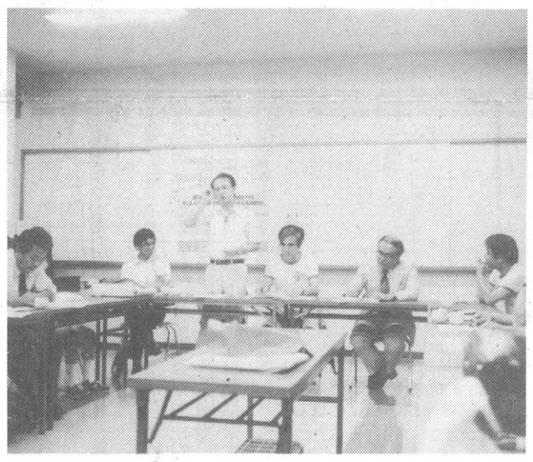
日本で四年後開催

たばこ問題のオリンピックともいわれる第五回喫煙と健康世界会議が、七月十日から十五日までの六日間、カナダのウィニペグ市で開かれた。七十九カ国、千八十六人の市民運動家、医学専門家、法律家、教育者が出席。日本からは国立ガンセンター研究所疫学部長・平山雄氏ら十一名が出席。嫌煙権運動の国際的なネットワークが作られたほか、四年後の一九八七年には、日本での開催が決定するなど、実りの多い会議となったようだ。嫌煙権確立をめざす人びとの会（代表・渡辺文学）は、世界会議に出席した平山雄氏、伊佐山芳郎氏（毎日新聞編集委員）、宮崎恭一氏（日本禁煙協会）、渡辺文学氏による帰国報告会を、八月十日、東京・市ケ谷YWCAで開いた。

この世界会議がスタートしたのは一九六七年。第一回はニューヨーク、ストックホルムと続き、今回がウィニペグ。

会議で発表された演題は「妊娠への影響」「間接喫煙」「発展途上国での喫煙」「非喫煙者の権利運動の出現」など約五〇〇。

会議場のロビーには、世界各国の子供たちの描いた禁煙ポスターが数百枚も貼られ、その前に送り込んだそうだが、タバコ産業を身内に抱えた日本政府・厚生省は省内から一人の係官も出席していない。専売公社からは、喫煙と健康問題調査室長が出席したのみという。



婦人報告会

五百ものテーマ

積極的なカナダ

「カナダ政府の喫煙対策に対する熱意がうかがえた」と出席者たち。

渡辺氏は「カナダのモニク・ベジャミン厚生大臣は、前夜祭から参加し、初日の演説では〝たばこを吸わない世代〟と〝たばこをやめる時〟という国家プロジェクトをスタートさせて、徹底した教育プログラムを組んでいるという報告をしました。地方自治体の首長なども積極的に参加、心臓財団やカナダがん協会など民間組織の取り組みも力ッチリ歯車がかみあっている感じがした」という。

その結果カナダでは、一九六六年に成人男性五四％、女性三二％であった喫煙者は、八一年には男性三七％、女性二九％へと低下した。

空港はどこも禁煙

「ウィニペグでも次に行ったバンクーバーでも、空港とダウンタウンを結ぶバスは禁煙だったが、日本では新東京国際空港と都心を結ぶリムジンバスは、前三列のみが禁煙席。いまもまだ、どの空港でも禁煙は当り前だと思うが、日本だけは例外。愛煙家天国を思い知らされた」というのは牧野氏。カナダで体験したいくつかを紹介。

会議が開かれたコンベンション・センターに隣接するホテルでは、受付の横に「禁煙客室もあります」という表示がしてあり、十八階のうち九階だけが禁煙客室になっているという。この会議のために急きょ取られた処置ではなく、二年も前からやっているのだという。アメリカには、禁煙ホテルもあるということだ。

現在、ウィニペグ市では、銀行や官庁の窓口、レストランなど公共の場所の喫煙規制条例を審議中だそうで、「それが環境委員会を通過したためらしく、同ホテルのエレベーターの中に取り付けていた灰皿がなくなり、〝禁煙〟の表示がなされた」という。

女性が会議リード

「会議で、女性の活躍がめざましかった」というのは伊佐山氏。

「喫煙しない世代作り」という思い切った構想を打ち出したカナダの女性厚生大臣モニク・ベンジャミンさん。一九七六年、米電話会社の職場嫌煙権訴訟で勝訴した原告ドナ・シンプさん等が会議をリードしていたという。

伊佐山氏は、ドナ・シンプさんに会い、非喫煙者の国際連帯ネットワークを実現したいと訴えたところ、「アメリカの市民団体も同じ考えを持っている」と、主なメンバーを集めてくれたという。

大会四日目の夜、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、そして日本の五カ国、三十人によって会合が持たれた。

「各国の嫌煙運動をさらに強力にすすめていくには、情報交換を密にしていく必要がある」ということで意見一致し、事務局をアメリカ・ミネアポリスの「非喫煙者の権利協会」に置くことを決定。

禁煙デーなど勧告

日本の途上国進出を警戒

次の日には、この国際ネットワークに対する賛同署名の用紙が用意された。

呼びかけ文には①非喫煙者の健康を守るためのキャンペーンを行うべきである②幼児、青少年、成人に対して、それぞれの年代に見合った教育プログラムを組み、喫煙が健康にとって大きなリスクを背負うことをキャンペーンすべきだ③たばこ会社の広告強化に反対し、政治の流れを変え、きれいな空気を吸う権利や、健康を守ることは、最大の課題である。職場や、公共の場における非喫煙者を守ろうーとの、特別コメントとして、とくに日本のような高喫煙者率の国で活動を強めなければならないという決議も加えられた。

国際ネットワーク多数の賛同者

三十二団体（グループ）と四十九人の個人から国際ネットワーク作りの賛同署名が得られたという。

「多くの問題の中で、議論が集中したのは、女性の喫煙、とりわけ妊娠中の喫煙による胎児への健康被害、および子どもたちの喫煙増加による健康被害の増大をどう防止するか。非喫煙者の権利をいかに拡大していくかの問題。発展途上国が新たなたばこ市場のターゲットにされている、だった」（伊佐山氏）

「発展途上国から四十ヵ国も参加があった。これは、欧米各国で需要が頭打ちとなったたばこ会社（主として民間企業が、販売を海外に求めはじめたことに対する危機感からだろう。日本の専売公社が、東南アジア、中近東などに輸出する専門の会社を設立しようとする動きがあるが、ウィニペグ会議で欧米の民間たばこ会社が厳しい批判を受けたように、日本政府も非難されるだろう」（渡辺氏）

禁煙に向って世界は動き始めた。各国は厚生大臣や政府関係機関の代表を何人も、この会議の女性解放　各国の平等法の役割と効力は？　私たちの雇用平等法をつくるために――」。

欧米諸国では、ここ十数年間に、雇用上の性差別をなくすための法律――「男女雇用平等法」が、次々と制定され、女性たちの大きな力になっていると言われている。

欧米各国での同法律が、女性解放といったい、どのような役割を果しているのか、来年にも国会に上程されようとしている、日本の「男女雇用平等法」とはどのような内容のものなのか、各国の様子を知りながら、役に立つ「平等法」のあり方について考えようというもの。

当日は、「雇用平等法には、なにが必要か」について、弁護士の中島通子さんからの報告。「フランスの男女職業平等法」について、日仏女性資料センターの林端校さん、「スウェーデンの情報」については、ビヤネール多美子さん（予定）が、「アメリカの女たちは今」をテーマに、都立高校教員の三井マリ子さんらが、それぞれ講演を行う。

日時…九月十七日（土）午後六時（受付開始）～九時。

場所…総評会館（地下鉄・千代田線新お茶の水駅下車）。

参加費…五〇〇円。

「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」〒一二六〇東京都新宿区荒木町三三中沢ビル三F「ジョキ内」☎〇三一三五七一九五六五。

婦人手帳

★★★　山でおいしいものは「オケラにトトキ」新潟ではそういうそうだが、この山草、知ってる人は少ないのではないか。私など、知ってる山草といえば、タラの芽、わらび、ゼンマイぐらい。大体は春のものと漠然と考えていたので、この夏友人の招きで訪れた、新潟県の弥彦神社（初詣での事故を記憶している方もあろう）の近くの山菜料理店「はにゅうの宿」で次から次へと出された山菜の数々、その自然の味付けの素晴しさには、ホトホト驚かされた。

★★★　サンカクエビヅル、ガバズミ、マタタビのワインは人工のものは全くつかってないのに、甘味・酸味・ニガ味がよく効いて、サンショウ味噌、ニンジンの和え物、キョウジャニンニク、ギボシなどの天ぷらをいっそうおいしくした。そして酢のものなどの小鉢にはハキ、クズのかれんな花や山桑の実が添えられ、ツリガネニンジン、ホタルブクロの花の袋から刻んだトマトがちらと顔を見せている（花ごと食べる）。薄桃色のヒルガオやオオマツヨイ草の黄が彩りよく皿に並べけっこういける薄味のおひたしとなっている。キノコの頃になると種類もぐんと賑やかになる。今いちばん種類の少い時期というが、それでもヒルガオなどの身近かな野草を入れ、十指に余る山の幸をいろいろ特徴を生かして調理してくれた。勿論、人工調味料はつかっていない。最後はサザエンキのウコギご飯。

★★★　五十四年から夫婦で店を始めたそうだが、主人はもともとはダイヤモンドの鑑定など鉱業関係の専門家で山を歩く。地質の調査、鉱物の分布は、植物とも強く関連していることに気づき、かねて興味を持っていた漢方の知識の実際を深めるため採取しているうちに、山菜料理が本業になったのだという。ジープで山荘に行き、そこから県境の山中に入り、雪渓まで山づたいに、その周辺に色んな種類の山菜がある。三〇％も高低が違うと植物は変る。丹念に見分けて少しだけ採取してくる。大変な苦労と思うが、本人はそれが好きで、客の喜びがうれしい。客の九〇％までは女性だそうで、会席などによく使われるというのもうなづける。自然のものを自然に――ここに味の原点があるかも知れない。

お断わり

八月二十日発行予定の本紙は諸般の事情により休刊致しました。お断わりし、お詫び申し上げます。

女たちの自立と連帯を探る待望の講座！
講座 主婦〈全3巻〉刊行開始！
武田京子・木村栄・田中喜美子編　各1200円
1 主婦はつくられる
●好評発売中
生まれおちたその時から、何よりも、女らしさを求められ、結婚志向に駆れる女たち――「家庭・学校・社会など、くらしの現場」と、絵本・漫画・女性誌・テレビなど各メディアの現状をとらえ、主婦がどのようにつくられていくかを浮きぼりにする。
2 壁のなかの主婦たち
●30日発売
「幸せ」を約束されたはずの結婚生活の行く手に待ちかまえるものは何か。「育児期の閉塞」「子離れ期のあせり」、やがて訪れる空しさ、そして三たびの老い。「こんなはずではなかった」という時きの底にある閉ざされた主婦の生き方を厳しく問い直す。
汐文社　東京都文京区本郷1-26　TEL.03-815-8421～4

満州・その幻の国ゆえに
林郁
●中国残留妻と孤児の記録　「涙の親子再会」の背景にあるものは？　今なお、中国で、日本で「戦後なき日々」を送っている中国残留妻と孤児たちの苛烈な運命を追った迫真のドキュメント。1200円
はじけ！・鳳仙花
富山妙子
●美と生への問い　日本各地の炭鉱から、第三世界、金芝河へと、生きることと絵のテーマを模索し続け、真摯に人間の解放を求めてきた一人の画家の生の記録。「わたしの解放」増補版。1800円
東京神田　筑摩書房　小川町2－8

"待ち望んでいた読書誌"と反響続々！
第1号好評発売中
〈第1号の主な内容〉
●宮尾登美子ヒストリア
●渡辺淳一の恋愛小説
●「文芸図書館レ・ロマン」はむずかしい文学論を抜きにして、小説のストーリーと主人公の生き方への共感を気軽に語り合える場として生まれた「本のカルチャー・センター」です。
●ともに読み、と考える本は――「地の果て至上の時」「別れる理由」「ひとびとの雪」「血族」「紅い陽炎」「厚化粧の女」「序の舞」「水なき雲」「流沙」「妻たちの思秋期」――など。
ビデオサロン別冊
文芸図書館 レ・ロマン
定価480円　A5判
発行／㈱コミュニケーションメントース　〒150 東京都渋谷区桜丘町27-3星ビル TEL.03-462-0771
発売／㈱玄光社　〒102 東京都千代田区飯田橋4-1-5 TEL.03-263-3511

労働旬報社
数百万人の、ちひろファンに贈る――。はじめての本格的な評伝!!　▼最新刊1200円
《いわさきちひろの生涯》滝いく子著
子どもたちを限りなく愛し、あふれる生命の輝きを描き続けた、ちひろの世界!!
続・育ちあいの子育て　NHKおはよう広場で好評　秋葉英則　980円
愛ときびしさの子育て　深谷鋼作　須長茂夫　980円
〒101東京都千代田区神田神保町3～17～28　電話03・263・7141

大月書店 東京文京本郷
●女性解放と民主主義、平和に生きた、らいてう八九年の軌跡
平塚らいてう著作集　全7巻
▼編集委員　大岡昇平・櫛田ふき・古在由重・小林登美枝・築添曙生・丸岡秀子・米田佐代子
②母性の主張について
エレン・ケイの思想との出会い、奥村博史との恋愛、共同生活、出産の体験をとおして自己の思想としての「母性主義」を確立してゆく。与謝野晶子との「母性保護論争」の発端となった発言など貴重な資料を収録。46判・3000円
①青せいとう鞜　らいてうの思想の原点　第1回配本　絶賛発売中
③社会改造に対する婦人の使命　第3回配本　10月10日刊

ミネルヴァ書房
夫婦の長い午後――人生
清野博子（読売新聞大阪本社婦人部記者）
夫婦とはいったい何なのか。さまざまな夫婦の生き方を通して「人生の長い午後」をより豊かに生きていく道を探る。
〈目次〉Ⅰ　夫婦とは何か／Ⅱ　愛と憎しみ――夫婦の危機／Ⅲ　揺れる四十代／Ⅳ　出会い、別れ、まわり道／Ⅴ　ある選択／Ⅵ　さまざま夫婦模様／Ⅶ　老いに向けて／Ⅷ　夫婦の手記――まとめにかえて
●四六判・一三〇〇円〒250
京都山科局私書箱24号　電話075(581)5191　振京都2-8076

7グループに120万円

新設のエイボングループサポート

活動分野も広く多彩

既報のとおり、エポボの性・女性が行なうグループ有効活動に対する援助を目的として、昭和58年度から、助成金額は一二万円の範囲で、その活動に必要な費用の一部を援助する、エポボの女性グループ活動サポートシステムが新設されました。

この制度は、女性の活動を支援するための助成金制度。活動分野は、限定しないが、の女性を中心とするグループ、有機栄養活動など、女性の活動を支援する、女性の開発・啓発活動、地域社会を豊かにする活動、スポーツ、教育、社会福祉、学術研究などを課題とするグループが対象。

【受賞グループ】

▽α会（横浜市・森山智恵子会長）

昭和五五年五月に設立、主婦を中心に、水俣病考え、それをめぐる環境、水俣フィルムクラブの研究者や水俣ニュースレターの編集者、障害者の会（脳障害・介助を必要とする人）

▽脳障害・大牟田ひまわり会（昭和二大年五月末、大牟田市・会員数二七人）

▽浜松婦人懇談会（フミニスト・サロン・浜松市・佐藤恒子代表・会員数九八人）

昭和五十年二月設立。昭和四五年、大牟田市で結成された婦人会を母体とする。「女性の自立と共生」をめざす。その研究・学習・活動を通じて、「ミニ・シリーズ」として、

▽浜松婦人懇談会（ミニ・サロン・浜松市・佐藤恒子代表・会員数九八人）

昭和五十年二月設立。昭和四五年三月に結成。主婦たちの「女性の自立と共生」をめざす。その研究・学習・活動を通じて、「ミニ・シリーズ」として、

▽福祉婦人懇談会（福祉市・久保田聖子代表・会員数一六人）

昭和四九年九月、子育ての中で知り合った母親四人で結成。会員の手づくりの人形劇を行う。地元の保育園や小学校、公民館などで開かれた親子の集いなどで、依頼を続けている。

▽人形劇団「夢の子」（静岡市・斉藤美代表・会員数九人）

昭和四八年五月、子育ての中で知り合った母親四人で結成。人形劇を創作し、全国の保育園・幼稚園・学校・公民館などで公演。「この地球を次の世代へ」をテーマとして、活動を続けている。

▽「女と健康会」（東京・中野区・会員数一六人）

昭和五六年、「女と健康」講演会を開いたことがきっかけで、「女と健康」を学ぶ会が発足。「女の健康を考える会」（昭和五十年一月）、「女と健康」（昭和五十一年二月）、「女と健康」（昭和五十二年一月）、「女と健康」（昭和五十三年一月）、「女と健康」（昭和五十四年一月）、「女と健康」（昭和五十五年一月）、「女と健康」（昭和五六年一月）、「女と健康」（昭和五七年一月）、「女と健康」（昭和五八年一月）、「女と健康」（昭和五九年一月）、「女と健康」（昭和六〇年一月）、「女と健康」（昭和六一年一月）、「女と健康」（昭和六二年一月）、「女と健康」（昭和六三年一月）、「女と健康」（昭和六四年一月）、「女と健康」（昭和六五年一月）、「女と健康」（昭和六六年一月）、「女と健康」（昭和六七年一月）、「女と健康」（昭和六八年一月）、「女と健康」（昭和六九年一月）、「女と健康」（昭和七〇年一月）、「女と健康」（昭和七一年一月）、「女と健康」（昭和七二年一月）、「女と健康」（昭和七三年一月）、「女と健康」（昭和七四年一月）、「女と健康」（昭和七五年一月）、「女と健康」（昭和七六年一月）、「女と健康」（昭和七七年一月）、「女と健康」（昭和七八年一月）、「女と健康」（昭和七九年一月）、「女と健康」（昭和八〇年一月）、「女と健康」（昭和八一年一月）、「女と健康」（昭和八二年一月）、「女と健康」（昭和八三年一月）、「女と健康」（昭和八四年一月）、「女と健康」（昭和八五年一月）、「女と健康」（昭和八六年一月）、「女と健康」（昭和八七年一月）、「女と健康」（昭和八八年一月）、「女と健康」（昭和八九年一月）、「女と健康」（昭和九〇年一月）、「女と健康」（昭和九一年一月）、「女と健康」（昭和九二年一月）、「女と健康」（昭和九三年一月）、「女と健康」（昭和九四年一月）、「女と健康」（昭和九五年一月）、「女と健康」（昭和九六年一月）、「女と健康」（昭和九七年一月）、「女と健康」（昭和九八年一月）、「女と健康」（昭和九九年一月）、「女と健康」（昭和一〇〇年一月）、「女と健康」（昭和一〇一年一月）、「女と健康」（昭和一〇二年一月）、「女と健康」（昭和一〇三年一月）、「女と健康」（昭和一〇四年一月）、「女と健康」（昭和一〇五年一月）、「女と健康」（昭和一〇六年一月）、「女と健康」（昭和一〇七年一月）、「女と健康」（昭和一〇八年一月）、「女と健康」（昭和一〇九年一月）、「女と健康」（昭和一一〇年一月）、「女と健康」（昭和一一一年一月）、「女と健康」（昭和一一二年一月）、「女と健康」（昭和一一三年一月）、「女と健康」（昭和一一四年一月）、「女と健康」（昭和一一五年一月）、「女と健康」（昭和一一六年一月）、「女と健康」（昭和一一七年一月）、「女と健康」（昭和一一八年一月）、「女と健康」（昭和一一九年一月）、「女と健康」（昭和一二〇年一月）、「女と健康」（昭和一二一年一月）、「女と健康」（昭和一二二年一月）、「女と健康」（昭和一二三年一月）、「女と健康」（昭和一二四年一月）、「女と健康」（昭和一二五年一月）、「女と健康」（昭和一二六年一月）、「女と健康」（昭和一二七年一月）、「女と健康」（昭和一二八年一月）、「女と健康」（昭和一二九年一月）、「女と健康」（昭和一三〇年一月）、「女と健康」（昭和一三一年一月）、「女と健康」（昭和一三二年一月）、「女と健康」（昭和一三三年一月）、「女と健康」（昭和一三四年一月）、「女と健康」（昭和一三五年一月）、「女と健康」（昭和一三六年一月）、「女と健康」（昭和一三七年一月）、「女と健康」（昭和一三八年一月）、「女と健康」（昭和一三九年一月）、「女と健康」（昭和一四〇年一月）、「女と健康」（昭和一四一年一月）、「女と健康」（昭和一四二年一月）、「女と健康」（昭和一四三年一月）、「女と健康」（昭和一四四年一月）、「女と健康」（昭和一四五年一月）、「女と健康」（昭和一四六年一月）、「女と健康」（昭和一四七年一月）、「女と健康」（昭和一四八年一月）、「女と健康」（昭和一四九年一月）、「女と健康」（昭和一五〇年一月）、「女と健康」（昭和一五一年一月）、「女と健康」（昭和一五二年一月）、「女と健康」（昭和一五三年一月）、「女と健康」（昭和一五四年一月）、「女と健康」（昭和一五五年一月）、「女と健康」（昭和一五六年一月）、「女と健康」（昭和一五七年一月）、「女と健康」（昭和一五八年一月）、「女と健康」（昭和一五九年一月）、「女と健康」（昭和一六〇年一月）、「女と健康」（昭和一六一年一月）、「女と健康」（昭和一六二年一月）、「女と健康」（昭和一六三年一月）、「女と健康」（昭和一六四年一月）、「女と健康」（昭和一六五年一月）、「女と健康」（昭和一六六年一月）、「女と健康」（昭和一六七年一月）、「女と健康」（昭和一六八年一月）、「女と健康」（昭和一六九年一月）、「女と健康」（昭和一七〇年一月）、「女と健康」（昭和一七一年一月）、「女と健康」（昭和一七二年一月）、「女と健康」（昭和一七三年一月）、「女と健康」（昭和一七四年一月）、「女と健康」（昭和一七五年一月）、「女と健康」（昭和一七六年一月）、「女と健康」（昭和一七七年一月）、「女と健康」（昭和一七八年一月）、「女と健康」（昭和一七九年一月）、「女と健康」（昭和一八〇年一月）、「女と健康」（昭和一八一年一月）、「女と健康」（昭和一八二年一月）、「女と健康」（昭和一八三年一月）、「女と健康」（昭和一八四年一月）、「女と健康」（昭和一八五年一月）、「女と健康」（昭和一八六年一月）、「女と健康」（昭和一八七年一月）、「女と健康」（昭和一八八年一月）、「女と健康」（昭和一八九年一月）、「女と健康」（昭和一九〇年一月）、「女と健康」（昭和一九一年一月）、「女と健康」（昭和一九二年一月）、「女と健康」（昭和一九三年一月）、「女と健康」（昭和一九四年一月）、「女と健康」（昭和一九五年一月）、「女と健康」（昭和一九六年一月）、「女と健康」（昭和一九七年一月）、「女と健康」（昭和一九八年一月）、「女と健康」（昭和一九九年一月）、「女と健康」（昭和二〇〇年一月）、「女と健康」（昭和二〇一年一月）、「女と健康」（昭和二〇二年一月）、「女と健康」（昭和二〇三年一月）、「女と健康」（昭和二〇四年一月）、「女と健康」（昭和二〇五年一月）、「女と健康」（昭和二〇六年一月）、「女と健康」（昭和二〇七年一月）、「女と健康」（昭和二〇八年一月）、「女と健康」（昭和二〇九年一月）、「女と健康」（昭和二一〇年一月）、「女と健康」（昭和二一一年一月）、「女と健康」（昭和二一二年一月）、「女と健康」（昭和二一三年一月）、「女と健康」（昭和二一四年一月）、「女と健康」（昭和二一五年一月）、「女と健康」（昭和二一六年一月）、「女と健康」（昭和二一七年一月）、「女と健康」（昭和二一八年一月）、「女と健康」（昭和二一九年一月）、「女と健康」（昭和二二〇年一月）、「女と健康」（昭和二二一年一月）、「女と健康」（昭和二二二年一月）、「女と健康」（昭和二二三年一月）、「女と健康」（昭和二二四年一月）、「女と健康」（昭和二二五年一月）、「女と健康」（昭和二二六年一月）、「女と健康」（昭和二二七年一月）、「女と健康」（昭和二二八年一月）、「女と健康」（昭和二二九年一月）、「女と健康」（昭和二三〇年一月）、「女と健康」（昭和二三一年一月）、「女と健康」（昭和二三二年一月）、「女と健康」（昭和二三三年一月）、「女と健康」（昭和二三四年一月）、「女と健康」（昭和二三五年一月）、「女と健康」（昭和二三六年一月）、「女と健康」（昭和二三七年一月）、「女と健康」（昭和二三八年一月）、「女と健康」（昭和二三九年一月）、「女と健康」（昭和二四〇年一月）、「女と健康」（昭和二四一年一月）、「女と健康」（昭和二四二年一月）、「女と健康」（昭和二四三年一月）、「女と健康」（昭和二四四年一月）、「女と健康」（昭和二四五年一月）、「女と健康」（昭和二四六年一月）、「女と健康」（昭和二四七年一月）、「女と健康」（昭和二四八年一月）、「女と健康」（昭和二四九年一月）、「女と健康」（昭和二五〇年一月）、「女と健康」（昭和二五一年一月）、「女と健康」（昭和二五二年一月）、「女と健康」（昭和二五三年一月）、「女と健康」（昭和二五四年一月）、「女と健康」（昭和二五五年一月）、「女と健康」（昭和二五六年一月）、「女と健康」（昭和二五七年一月）、「女と健康」（昭和二五八年一月）、「女と健康」（昭和二五九年一月）、「女と健康」（昭和二六〇年一月）、「女と健康」（昭和二六一年一月）、「女と健康」（昭和二六二年一月）、「女と健康」（昭和二六三年一月）、「女と健康」（昭和二六四年一月）、「女と健康」（昭和二六五年一月）、「女と健康」（昭和二六六年一月）、「女と健康」（昭和二六七年一月）、「女と健康」（昭和二六八年一月）、「女と健康」（昭和二六九年一月）、「女と健康」（昭和二七〇年一月）、「女と健康」（昭和二七一年一月）、「女と健康」（昭和二七二年一月）、「女と健康」（昭和二七三年一月）、「女と健康」（昭和二七四年一月）、「女と健康」（昭和二七五年一月）、「女と健康」（昭和二七六年一月）、「女と健康」（昭和二七七年一月）、「女と健康」（昭和二七八年一月）、「女と健康」（昭和二七九年一月）、「女と健康」（昭和二八〇年一月）、「女と健康」（昭和二八一年一月）、「女と健康」（昭和二八二年一月）、「女と健康」（昭和二八三年一月）、「女と健康」（昭和二八四年一月）、「女と健康」（昭和二八五年一月）、「女と健康」（昭和二八六年一月）、「女と健康」（昭和二八七年一月）、「女と健康」（昭和二八八年一月）、「女と健康」（昭和二八九年一月）、「女と健康」（昭和二九〇年一月）、「女と健康」（昭和二九一年一月）、「女と健康」（昭和二九二年一月）、「女と健康」（昭和二九三年一月）、「女と健康」（昭和二九四年一月）、「女と健康」（昭和二九五年一月）、「女と健康」（昭和二九六年一月）、「女と健康」（昭和二九七年一月）、「女と健康」（昭和二九八年一月）、「女と健康」（昭和二九九年一月）、「女と健康」（昭和三〇〇年一月）、「女と健康」（昭和三〇一年一月）、「女と健康」（昭和三〇二年一月）、「女と健康」（昭和三〇三年一月）、「女と健康」（昭和三〇四年一月）、「女と健康」（昭和三〇五年一月）、「女と健康」（昭和三〇六年一月）、「女と健康」（昭和三〇七年一月）、「女と健康」（昭和三〇八年一月）、「女と健康」（昭和三〇九年一月）、「女と健康」（昭和三一〇年一月）、「女と健康」（昭和三一一年一月）、「女と健康」（昭和三一二年一月）、「女と健康」（昭和三一三年一月）、「女と健康」（昭和三一四年一月）、「女と健康」（昭和三一五年一月）、「女と健康」（昭和三一六年一月）、「女と健康」（昭和三一七年一月）、「女と健康」（昭和三一八年一月）、「女と健康」（昭和三一九年一月）、「女と健康」（昭和三二〇年一月）、「女と健康」（昭和三二一年一月）、「女と健康」（昭和三二二年一月）、「女と健康」（昭和三二三年一月）、「女と健康」（昭和三二四年一月）、「女と健康」（昭和三二五年一月）、「女と健康」（昭和三二六年一月）、「女と健康」（昭和三二七年一月）、「女と健康」（昭和三二八年一月）、「女と健康」（昭和三二九年一月）、「女と健康」（昭和三三〇年一月）、「女と健康」（昭和三三一年一月）、「女と健康」（昭和三三二年一月）、「女と健康」（昭和三三三年一月）、「女と健康」（昭和三三四年一月）、「女と健康」（昭和三三五年一月）、「女と健康」（昭和三三六年一月）、「女と健康」（昭和三三七年一月）、「女と健康」（昭和三三八年一月）、「女と健康」（昭和三三九年一月）、「女と健康」（昭和三四〇年一月）、「女と健康」（昭和三四一年一月）、「女と健康」（昭和三四二年一月）、「女と健康」（昭和三四三年一月）、「女と健康」（昭和三四四年一月）、「女と健康」（昭和三四五年一月）、「女と健康」（昭和三四六年一月）、「女と健康」（昭和三四七年一月）、「女と健康」（昭和三四八年一月）、「女と健康」（昭和三四九年一月）、「女と健康」（昭和三五〇年一月）、「女と健康」（昭和三五一年一月）、「女と健康」（昭和三五二年一月）、「女と健康」（昭和三五三年一月）、「女と健康」（昭和三五四年一月）、「女と健康」（昭和三五五年一月）、「女と健康」（昭和三五六年一月）、「女と健康」（昭和三五七年一月）、「女と健康」（昭和三五八年一月）、「女と健康」（昭和三五九年一月）、「女と健康」（昭和三六〇年一月）、「女と健康」（昭和三六一年一月）、「女と健康」（昭和三六二年一月）、「女と健康」（昭和三六三年一月）、「女と健康」（昭和三六四年一月）、「女と健康」（昭和三六五年一月）、「女と健康」（昭和三六六年一月）、「女と健康」（昭和三六七年一月）、「女と健康」（昭和三六八年一月）、「女と健康」（昭和三六九年一月）、「女と健康」（昭和三七〇年一月）、「女と健康」（昭和三七一年一月）、「女と健康」（昭和三七二年一月）、「女と健康」（昭和三七三年一月）、「女と健康」（昭和三七四年一月）、「女と健康」（昭和三七五年一月）、「女と健康」（昭和三七六年一月）、「女と健康」（昭和三七七年一月）、「女と健康」（昭和三七八年一月）、「女と健康」（昭和三七九年一月）、「女と健康」（昭和三八〇年一月）、「女と健康」（昭和三八一年一月）、「女と健康」（昭和三八二年一月）、「女と健康」（昭和三八三年一月）、「女と健康」（昭和三八四年一月）、「女と健康」（昭和三八五年一月）、「女と健康」（昭和三八六年一月）、「女と健康」（昭和三八七年一月）、「女と健康」（昭和三八八年一月）、「女と健康」（昭和三八九年一月）、「女と健康」（昭和三九〇年一月）、「女と健康」（昭和三九一年一月）、「女と健康」（昭和三九二年一月）、「女と健康」（昭和三九三年一月）、「女と健康」（昭和三九四年一月）、「女と健康」（昭和三九五年一月）、「女と健康」（昭和三九六年一月）、「女と健康」（昭和三九七年一月）、「女と健康」（昭和三九八年一月）、「女と健康」（昭和三九九年一月）、「女と健康」（昭和四〇〇年一月）、「女と健康」（昭和四〇一年一月）、「女と健康」（昭和四〇二年一月）、「女と健康」（昭和四〇三年一月）、「女と健康」（昭和四〇四年一月）、「女と健康」（昭和四〇五年一月）、「女と健康」（昭和四〇六年一月）、「女と健康」（昭和四〇七年一月）、「女と健康」（昭和四〇八年一月）、「女と健康」（昭和四〇九年一月）、「女と健康」（昭和四一〇年一月）、「女と健康」（昭和四一一年一月）、「女と健康」（昭和四一二年一月）、「女と健康」（昭和四一三年一月）、「女と健康」（昭和四一四年一月）、「女と健康」（昭和四一五年一月）、「女と健康」（昭和四一六年一月）、「女と健康」（昭和四一七年一月）、「女と健康」（昭和四一八年一月）、「女と健康」（昭和四一九年一月）、「女と健康」（昭和四二〇年一月）、「女と健康」（昭和四二一年一月）、「女と健康」（昭和四二二年一月）、「女と健康」（昭和四二三年一月）、「女と健康」（昭和四二四年一月）、「女と健康」（昭和四二五年一月）、「女と健康」（昭和四二六年一月）、「女と健康」（昭和四二七年一月）、「女と健康」（昭和四二八年一月）、「女と健康」（昭和四二九年一月）、「女と健康」（昭和四三〇年一月）、「女と健康」（昭和四三一年一月）、「女と健康」（昭和四三二年一月）、「女と健康」（昭和四三三年一月）、「女と健康」（昭和四三四年一月）、「女と健康」（昭和四三五年一月）、「女と健康」（昭和四三六年一月）、「女と健康」（昭和四三七年一月）、「女と健康」（昭和四三八年一月）、「女と健康」（昭和四三九年一月）、「女と健康」（昭和四四〇年一月）、「女と健康」（昭和四四一年一月）、「女と健康」（昭和四四二年一月）、「女と健康」（昭和四四三年一月）、「女と健康」（昭和四四四年一月）、「女と健康」（昭和四四五年一月）、「女と健康」（昭和四四六年一月）、「女と健康」（昭和四四七年一月）、「女と健康」（昭和四四八年一月）、「女と健康」（昭和四四九年一月）、「女と健康」（昭和四五〇年一月）、「女と健康」（昭和四五一年一月）、「女と健康」（昭和四五二年一月）、「女と健康」（昭和四五三年一月）、「女と健康」（昭和四五四年一月）、「女と健康」（昭和四五五年一月）、「女と健康」（昭和四五六年一月）、「女と健康」（昭和四五七年一月）、「女と健康」（昭和四五八年一月）、「女と健康」（昭和四五九年一月）、「女と健康」（昭和四六〇年一月）、「女と健康」（昭和四六一年一月）、「女と健康」（昭和四六二年一月）、「女と健康」（昭和四六三年一月）、「女と健康」（昭和四六四年一月）、「女と健康」（昭和四六五年一月）、「女と健康」（昭和四六六年一月）、「女と健康」（昭和四六七年一月）、「女と健康」（昭和四六八年一月）、「女と健康」（昭和四六九年一月）、「女と健康」（昭和四七〇年一月）、「女と健康」（昭和四七一年一月）、「女と健康」（昭和四七二年一月）、「女と健康」（昭和四七三年一月）、「女と健康」（昭和四七四年一月）、「女と健康」（昭和四七五年一月）、「女と健康」（昭和四七六年一月）、「女と健康」（昭和四七七年一月）、「女と健康」（昭和四七八年一月）、「女と健康」（昭和四七九年一月）、「女と健康」（昭和四八〇年一月）、「女と健康」（昭和四八一年一月）、「女と健康」（昭和四八二年一月）、「女と健康」（昭和四八三年一月）、「女と健康」（昭和四八四年一月）、「女と健康」（昭和四八五年一月）、「女と健康」（昭和四八六年一月）、「女と健康」（昭和四八七年一月）、「女と健康」（昭和四八八年一月）、「女と健康」（昭和四八九年一月）、「女と健康」（昭和四九〇年一月）、「女と健康」（昭和四九一年一月）、「女と健康」（昭和四九二年一月）、「女と健康」（昭和四九三年一月）、「女と健康」（昭和四九四年一月）、「女と健康」（昭和四九五年一月）、「女と健康」（昭和四九六年一月）、「女と健康」（昭和四九七年一月）、「女と健康」（昭和四九八年一月）、「女と健康」（昭和四九九年一月）、「女と健康」（昭和五〇〇年一月）、「女と健康」（昭和五〇一年一月）、「女と健康」（昭和五〇二年一月）、「女と健康」（昭和五〇三年一月）、「女と健康」（昭和五〇四年一月）、「女と健康」（昭和五〇五年一月）、「女と健康」（昭和五〇六年一月）、「女と健康」（昭和五〇七年一月）、「女と健康」（昭和五〇八年一月）、「女と健康」（昭和五〇九年一月）、「女と健康」（昭和五一〇年一月）、「女と健康」（昭和五一一年一月）、「女と健康」（昭和五一二年一月）、「女と健康」（昭和五一三年一月）、「女と健康」（昭和五一四年一月）、「女と健康」（昭和五一五年一月）、「女と健康」（昭和五一六年一月）、「女と健康」（昭和五一七年一月）、「女と健康」（昭和五一八年一月）、「女と健康」（昭和五一九年一月）、「女と健康」（昭和五二〇年一月）、「女と健康」（昭和五二一年一月）、「女と健康」（昭和五二二年一月）、「女と健康」（昭和五二三年一月）、「女と健康」（昭和五二四年一月）、「女と健康」（昭和五二五年一月）、「女と健康」（昭和五二六年一月）、「女と健康」（昭和五二七年一月）、「女と健康」（昭和五二八年一月）、「女と健康」（昭和五二九年一月）、「女と健康」（昭和五三〇年一月）、「女と健康」（昭和五三一年一月）、「女と健康」（昭和五三二年一月）、「女と健康」（昭和五三三年一月）、「女と健康」（昭和五三四年一月）、「女と健康」（昭和五三五年一月）、「女と健康」（昭和五三六年一月）、「女と健康」（昭和五三七年一月）、「女と健康」（昭和五三八年一月）、「女と健康」（昭和五三九年一月）、「女と健康」（昭和五四〇年一月）、「女と健康」（昭和五四一年一月）、「女と健康」（昭和五四二年一月）、「女と健康」（昭和五四三年一月）、「女と健康」（昭和五四四年一月）、「女と健康」（昭和五四五年一月）、「女と健康」（昭和五四六年一月）、「女と健康」（昭和五四七年一月）、「女と健康」（昭和五四八年一月）、「女と健康」（昭和五四九年一月）、「女と健康」（昭和五五〇年一月）、「女と健康」（昭和五五一年一月）、「女と健康」（昭和五五二年一月）、「女と健康」（昭和五五三年一月）、「女と健康」（昭和五五四年一月）、「女と健康」（昭和五五五年一月）、「女と健康」（昭和五五六年一月）、「女と健康」（昭和五五七年一月）、「女と健康」（昭和五五八年一月）、「女と健康」（昭和五五九年一月）、「女と健康」（昭和五六〇年一月）、「女と健康」（昭和五六一年一月）、「女と健康」（昭和五六二年一月）、「女と健康」（昭和五六三年一月）、「女と健康」（昭和五六四年一月）、「女と健康」（昭和五六五年一月）、「女と健康」（昭和五六六年一月）、「女と健康」（昭和五六七年一月）、「女と健康」（昭和五六八年一月）、「女と健康」（昭和五六九年一月）、「女と健康」（昭和五七〇年一月）、「女と健康」（昭和五七一年一月）、「女と健康」（昭和五七二年一月）、「女と健康」（昭和五七三年一月）、「女と健康」（昭和五七四年一月）、「女と健康」（昭和五七五年一月）、「女と健康」（昭和五七六年一月）、「女と健康」（昭和五七七年一月）、「女と健康」（昭和五七八年一月）、「女と健康」（昭和五七九年一月）、「女と健康」（昭和五八〇年一月）、「女と健康」（昭和五八一年一月）、「女と健康」（昭和五八二年一月）、「女と健康」（昭和五八三年一月）、「女と健康」（昭和五八四年一月）、「女と健康」（昭和五八五年一月）、「女と健康」（昭和五八六年一月）、「女と健康」（昭和五八七年一月）、「女と健康」（昭和五八八年一月）、「女と健康」（昭和五八九年一月）、「女と健康」（昭和五九〇年一月）、「女と健康」（昭和五九一年一月）、「女と健康」（昭和五九二年一月）、「女と健康」（昭和五九三年一月）、「女と健康」（昭和五九四年一月）、「女と健康」（昭和五九五年一月）、「女と健康」（昭和五九六年一月）、「女と健康」（昭和五九七年一月）、「女と健康」（昭和五九八年一月）、「女と健康」（昭和五九九年一月）、「女と健康」（昭和六〇〇年一月）、「女と健康」（昭和六〇一年一月）、「女と健康」（昭和六〇二年一月）、「女と健康」（昭和六〇三年一月）、「女と健康」（昭和六〇四年一月）、「女と健康」（昭和六〇五年一月）、「女と健康」（昭和六〇六年一月）、「女と健康」（昭和六〇七年一月）、「女と健康」（昭和六〇八年一月）、「女と健康」（昭和六〇九年一月）、「女と健康」（昭和六一〇年一月）、「女と健康」（昭和六一一年一月）、「女と健康」（昭和六一二年一月）、「女と健康」（昭和六一三年一月）、「女と健康」（昭和六一四年一月）、「女と健康」（昭和六一五年一月）、「女と健康」（昭和六一六年一月）、「女と健康」（昭和六一七年一月）、「女と健康」（昭和六一八年一月）、「女と健康」（昭和六一九年一月）、「女と健康」（昭和六二〇年一月）、「女と健康」（昭和六二一年一月）、「女と健康」（昭和六二二年一月）、「女と健康」（昭和六二三年一月）、「女と健康」（昭和六二四年一月）、「女と健康」（昭和六二五年一月）、「女と健康」（昭和六二六年一月）、「女と健康」（昭和六二七年一月）、「女と健康」（昭和六二八年一月）、「女と健康」（昭和六二九年一月）、「女と健康」（昭和六三〇年一月）、「女と健康」（昭和六三一年一月）、「女と健康」（昭和六三二年一月）、「女と健康」（昭和六三三年一月）、「女と健康」（昭和六三四年一月）、「女と健康」（昭和六三五年一月）、「女と健康」（昭和六三六年一月）、「女と健康」（昭和六三七年一月）、「女と健康」（昭和六三八年一月）、「女と健康」（昭和六三九年一月）、「女と健康」（昭和六四〇年一月）、「女と健康」（昭和六四一年一月）、「女と健康」（昭和六四二年一月）、「女と健康」（昭和六四三年一月）、「女と健康」（昭和六四四年一月）、「女と健康」（昭和六四五年一月）、「女と健康」（昭和六四六年一月）、「女と健康」（昭和六四七年一月）、「女と健康」（昭和六四八年一月）、「女と健康」（昭和六四九年一月）、「女と健康」（昭和六五〇年一月）、「女と健康」（昭和六五一年一月）、「女と健康」（昭和六五二年一月）、「女と健康」（昭和六五三年一月）、「女と健康」（昭和六五四年一月）、「女と健康」（昭和六五五年一月）、「女と健康」（昭和六五六年一月）、「女と健康」（昭和六五七年一月）、「女と健康」（昭和六五八年一月）、「女と健康」（昭和六五九年一月）、「女と健康」（昭和六六〇年一月）、「女と健康」（昭和六六一年一月）、「女と健康」（昭和六六二年一月）、「女と健康」（昭和六六三年一月）、「女と健康」（昭和六六四年一月）、「女と健康」（昭和六六五年一月）、「女と健康」（昭和六六六年一月）、「女と健康」（昭和六六七年一月）、「女と健康」（昭和六六八年一月）、「女と健康」（昭和六六九年一月）、「女と健康」（昭和六七〇年一月）、「女と健康」（昭和六七一年一月）、「女と健康」（昭和六七二年一月）、「女と健康」（昭和六七三年一月）、「女と健康」（昭和六七四年一月）、「女と健康」（昭和六七五年一月）、「女と健康」（昭和六七六年一月）、「女と健康」（昭和六七七年一月）、「女と健康」（昭和六七八年一月）、「女と健康」（昭和六七九年一月）、「女と健康」（昭和六八〇年一月）、「女と健康」（昭和六八一年一月）、「女と健康」（昭和六八二年一月）、「女と健康」（昭和六八三年一月）、「女と健康」（昭和六八四年一月）、「女と健康」（昭和六八五年一月）、「女と健康」（昭和六八六年一月）、「女と健康」（昭和六八七年一月）、「女と健康」（昭和六八八年一月）、「女と健康」（昭和六八九年一月）、「女と健康」（昭和六九〇年一月）、「女と健康」（昭和六九一年一月）、「女と健康」（昭和六九二年一月）、「女と健康」（昭和六九三年一月）、「女と健康」（昭和六九四年一月）、「女と健康」（昭和六九五年一月）、「女と健康」（昭和六九六年一月）、「女と健康」（昭和六九七年一月）、「女と健康」（昭和六九八年一月）、「女と健康」（昭和六九九年一月）、「女と健康」（昭和七〇〇年一月）、「女と健康」（昭和七〇一年一月）、「女と健康」（昭和七〇二年一月）、「女と健康」（昭和七〇三年一月）、「女と健康」（昭和七〇四年一月）、「女と健康」（昭和七〇五年一月）、「女と健康」（昭和七〇六年一月）、「女と健康」（昭和七〇七年一月）、「女と健康」（昭和七〇八年一月）、「女と健康」（昭和七〇九年一月）、「女と健康」（昭和七一〇年一月）、「女と健康」（昭和七一一年一月）、「女と健康」（昭和七一二年一月）、「女と健康」（昭和七一三年一月）、「女と健康」（昭和七一四年一月）、「女と健康」（昭和七一五年一月）、「女と健康」（昭和七一六年一月）、「女と健康」（昭和七一七年一月）、「女と健康」（昭和七一八年一月）、「女と健康」（昭和七一九年一月）、「女と健康」（昭和七二〇年一月）、「女と健康」（昭和七二一年一月）、「女と健康」（昭和七二二年一月）、「女と健康」（昭和七二三年一月）、「女と健康」（昭和七二四年一月）、「女と健康」（昭和七二五年一月）、「女と健康」（昭和七二六年一月）、「女と健康」（昭和七二七年一月）、「女と健康」（昭和七二八年一月）、「女と健康」（昭和七二九年一月）、「女と健康」（昭和七三〇年一月）、「女と健康」（昭和七三一年一月）、「女と健康」（昭和七三二年一月）、「女と健康」（昭和七三三年一月）、「女と健康」（昭和七三四年一月）、「女と健康」（昭和七三五年一月）、「女と健康」（昭和七三六年一月）、「女と健康」（昭和七三七年一月）、「女と健康」（昭和七三八年一月）、「女と健康」（昭和七三九年一月）、「女と健康」（昭和七四〇年一月）、「女と健康」（昭和七四一年一月）、「女と健康」（昭和七四二年一月）、「女と健康」（昭和七四三年一月）、「女と健康」（昭和七四四年一月）、「女と健康」（昭和七四五年一月）、「女と健康」（昭和七四六年一月）、「女と健康」（昭和七四七年一月）、「女と健康」（昭和七四八年一月）、「女と健康」（昭和七四九年一月）、「女と健康」（昭和七五〇年一月）、「女と健康」（昭和七五一年一月）、「女と健康」（昭和七五二年一月）、「女と健康」（昭和七五三年一月）、「女と健康」（昭和七五四年一月）、「女と健康」（昭和七五五年一月）、「女と健康」（昭和七五六年一月）、「女と健康」（昭和七五七年一月）、「女と健康」（昭和七五八年一月）、「女と健康」（昭和七五九年一月）、「女と健康」（昭和七六〇年一月）、「女と健康」（昭和七六一年一月）、「女と健康」（昭和七六二年一月）、「女と健康」（昭和七六三年一月）、「女と健康」（昭和七六四年一月）、「女と健康」（昭和七六五年一月）、「女と健康」（昭和七六六年一月）、「女と健康」（昭和七六七年一月）、「女と健康」（昭和七六八年一月）、「女と健康」（昭和七六九年一月）、「女と健康」（昭和七七〇年一月）、「女と健康」（昭和七七一年一月）、「女と健康」（昭和七七二年一月）、「女と健康」（昭和七七三年一月）、「女と健康」（昭和七七四年一月）、「女と健康」（昭和七七五年一月）、「女と健康」（昭和七七六年一月）、「女と健康」（昭和七七七年一月）、「女と健康」（昭和七七八年一月）、「女と健康」（昭和七七九年一月）、「女と健康」（昭和七八〇年一月）、「女と健康」（昭和七八一年一月）、「女と健康」（昭和七八二年一月）、「女と健康」（昭和七八三年一月）、「女と健康」（昭和七八四年一月）、「女と健康」（昭和七八五年一月）、「女と健康」（昭和七八六年一月）、「女と健康」（昭和七八七年一月）、「女と健康」（昭和七八八年一月）、「女と健康」（昭和七八九年一月）、「女と健康」（昭和七九〇年一月）、「女と健康」（昭和七九一年一月）、「女と健康」（昭和七九二年一月）、「女と健康」（昭和七九三年一月）、「女と健康」（昭和七九四年一月）、「女と健康」（昭和七九五年一月）、「女と健康」（昭和七九六年一月）、「女と健康」（昭和七九七年一月）、「女と健康」（昭和七九八年一月）、「女と健康」（昭和七九九年一月）、「女と健康」（昭和八〇〇年一月）、「女と健康」（昭和八〇一年一月）、「女と健康」（昭和八〇二年一月）、「女と健康」（昭和八〇三年一月）、「女と健康」（昭和八〇四年一月）、「女と健康」（昭和八〇五年一月）、「女と健康」（昭和八〇六年一月）、「女と健康」（昭和八〇七年一月）、「女と健康」（昭和八〇八年一月）、「女と健康」（昭和八〇九年一月）、「女と健康」（昭和八一〇年一月）、「女と健康」（昭和八一一年一月）、「女と健康」（昭和八一二年一月）、「女と健康」（昭和八一三年一月）、「女と健康」（昭和八一四年一月）、「女と健康」（昭和八一五年一月）、「女と健康」（昭和八一六年一月）、「女と健康」（昭和八一七年一月）、「女と健康」（昭和八一八年一月）、「女と健康」（昭和八一九年一月）、「女と健康」（昭和八二〇年一月）、「女と健康」（昭和八二一年一月）、「女と健康」（昭和八二二年一月）、「女と健康」（昭和八二三年一月）、「女と健康」（昭和八二四年一月）、「女と健康」（昭和八二五年一月）、「女と健康」（昭和八二六年一月）、「女と健康」（昭和八二七年一月）、「女と健康」（昭和八二八年一月）、「女と健康」（昭和八二九年一月）、「女と健康」（昭和八三〇年一月）、「女と健康」（昭和八三一年一月）、「女と健康」（昭和八三二年一月）、「女と健康」（昭和八三三年一月）、「女と健康」（昭和八三四年一月）、「女と健康」（昭和八三五年一月）、「女と健康」（昭和八三六年一月）、「女と健康」（昭和八三七年一月）、「女と健康」（昭和八三八年一月）、「女と健康」（昭和八三九年一月）、「女と健康」（昭和八四〇年一月）、「女と健康」（昭和八四一年一月）、「女と健康」（昭和八四二年一月）、「女と健康」（昭和八四三年一月）、「女と健康」（昭和八四四年一月）、「女と健康」（昭和八四五年一月）、「女と健康」（昭和八四六年一月）、「女と健康」（昭和八四七年一月）、「女と健康」（昭和八四八年一月）、「女と健康」（昭和八四九年一月）、「女と健康」（昭和八五〇年一月）、「女と健康」（昭和八五一年一月）、「女と健康」（昭和八五二年一月）、「女と健康」（昭和八五三年一月）、「女と健康」（昭和八五四年一月）、「女と健康」（昭和八五五年一月）、「女と健康」（昭和八五六年一月）、「女と健康」（昭和八五七年一月）、「女と健康」（昭和八五八年一月）、「女と健康」（昭和八五九年一月）、「女と健康」（昭和八六〇年一月）、「女と健康」（昭和八六一年一月）、「女と健康」（昭和八六二年一月）、「女と健康」（昭和八六三年一月）、「女と健康」（昭和八六四年一月）、「女と健康」（昭和八六五年一月）、「女と健康」（昭和八六六年一月）、「女と健康」（昭和八六七年一月）、「女と健康」（昭和八六八年一月）、「女と健康」（昭和八六九年一月）、「女と健康」（昭和八七〇年一月）、「女と健康」（昭和八七一年一月）、「女と健康」（昭和八七二年一月）、「女と健康」（昭和八七三年一月）、「女と健康」（昭和八七

遺伝毒性を考える集い

子孫の日記念集会

遺伝毒性を考える集い（豆腐代表）では、第三回子孫の日記念集会を八月十九日、東京都有楽町消費センターで行った。

〝子孫の日〟は、遺伝毒物AF2が禁止された昭和四十九年、世界で初めて子孫を守るための「食品添加物などの遺伝的安全評価の基準」が日本で作られた。この基準が出来た日を記念して、遺伝毒性を考える集いでは、五十六年に第一回子孫の日を開き、「子孫の日」制定を考えるという声明文を発表。昨年は、北海道消費者連盟がこれに呼応。徐々にだが、遺伝毒性について考える輪が広がりつつある。今回は「安全こそ生きる残る道」をテーマに都立立川短大教授・吉田幸弘氏が〝子孫の安全を考える〟主として集団遺伝学の立場から〟を、NHK農林水産業部・中村彰良氏は〝外国の農薬事情〟を、消費者運動家、小若順一氏は〝輸入食糧と危険性〟を語った。いずれも興味深い話しばかりだが、吉田氏の遺伝学に焦点を絞って紹介しよう。

豆代表

吉田教授

昭和二十年、日本に投下された原爆、続いてビキニ事件—これ等で問題になるのは放射線についてだ。日本のみに使われた合成保存料AF2においても、発がん性のある添加物という事で禁止された。その裏にある、人類に取っては最も恐ろしい遺伝毒性については見過ごされていた。

子孫の代に症状が

「なぜか」解かりにくいという点にある。急性毒性だと下痢や吐き気などによって、症状の放射線を浴びたり、遺伝毒物の摂取によって、遺伝子が変化を起すとどうなるかについて、吉田教授は次のように語る。

突然変異遺伝子には、優性と劣性とがある。

この優、劣は単に言葉の表現の問題であって、優がすぐれた遺伝子、劣は悪い遺伝子と思われがちだが、優の中にも悪い遺伝子があることを説明。

例えば、PKU（フェノール・ケトン尿症）という尿の中にフェニケルトンという物質が混じって出て来る病気がある。

人間が生きるために必要なタンパク質は二〇種類のアミノ酸から出来ており、フェニルアラニンもその一つ。これを私たちは食物から取り、必要以上に摂取すると酸化する仕組になっている。酸化するためには酵素が必要で、この酵素は遺伝子が作る。もし遺伝子が何等かのため変化すると酵素が作れなくなり、余ったフェニルアラニンはフェニケルトンとなって尿から排出されることになる。

子供の脳には作用

このフェニケルトンは神経系の発育を抑える有害な物質で、大人なら問題はないが、子供の時だと脳が発育しない、つまり精薄児となってしまうという。

正常な遺伝子が突然変異を起したために起る結果の一つだ。

普通遺伝子は父親からAを、母親からもAという型でもらい二個（AA）持っている。が、片方から突然変異を起した遺伝子Aをもらうと（AA）となる。この場合、一方のAが酵素を作るのでPKUの保因者ではあるが、表面的には何の変化も見られない。このように、表現力が弱く、かくされた遺伝子を劣性といい、かくした遺伝子を優性という。

60人に一人保因者

「今日本では六〇人中一人、PKUの保因者がいるといわれています。保因者と保因者が結婚すると、症状が表に出てしまう。遺伝子を突然変異させる有害物質を取り続けるなら、さらに増え、数代後になって、困ったと気がついても、どうにもならないのです」

PKUの場合、一種の遺伝子によって症状が表に出るが、兎唇口がい、肛門狭さく症などは突然変異の遺伝子が数個たまった時に出る多因性遺伝だ。

また、優性の保因子を持っていても症状に出ない凝正常や、表面に出ても症状が軽い場合はまったく分らないものもある。虚弱体質も突然変異で起る場合が多い。

「この様にめだたない症状も多いので、他の病気に比べて社会では取り上げにくいという特長がある。もう一つの特長は、一度変化すると元にもどらないということです」

カマボコ、ハンペン

昭和四十年から四十九年にかけて、日本人は沢山のAF2を摂取した。カマボコ、ハンペン、トウフなどに混入されたAF2をくり返し、くり返し食べた。禁止され四年、AF2そのものは体の中から消えたが、突然変異した遺伝子はABCという型で残されているという。

遺伝子の変化は、一回に三〇ﾐﾘｸﾞﾗﾑ食べようが、一年の間に数回に分けて三〇ﾐﾘｸﾞﾗﾑ食べようが結果は同じであると。一回の摂取が許容量以下だからいいのではなく、トータルの摂取量だという。

集団でみると、集団の中の一人が三〇ﾐﾘｸﾞﾗﾑの放射線を浴びたのと、一〇ﾐﾘｸﾞﾗﾑを三人、一ﾐﾘｸﾞﾗﾑを三〇人浴びたのと、その集団における突然変異変化は同じだという。

「一人が何回食べたかを発展させると、その集団全体がどのくらい食べたかの問題になる。日本人はAF2を一五ﾄﾝ食べたと言われるが、一〇人で食べようが一人、一万人で食べようが突然変異によって集団に与える影響は同じだということです」

こうした考え方が確立されたのは、昭和二十八年、放射線の害によるICRPの勧告によってだ。

「最近は遺伝毒性物を検出する技術が発達したので、検査してみると次から次に出て来る。機械の性能が良くなったのでわずかなものでも出るようになったとも言える。これを全部ダメと拒否すると飢え死にしなければならない。利益と危険のバランスを考えるべき」

レントゲンの方射線が悪いからと、レントゲンを拒否すれば、原因がつかめず死ぬ場合もある。将来、レントゲンに代るものが出て来るまでは仕方がない。利益の大きさがどちらにあるかを見極めることが大切だ。

「利益がないのにやることほどバカバカしいものはない。例えば食品につける着色料などが最もいい例だ」

商売上の利益ではなく、人類としての利益ではなく、日本全体が天びんにかけ、突然変異の数を減らさなければ、人類は大きく狂った方向に進んでしまうと訴える。

ザ・スパイス⑤

ペパー

ラーメンにパッとふりかける。肉料理の下ごしらえに、と、料理にさほど精通していない人でも、気軽に使っている〝胡椒〟＝ペパー。

今では、世界中、どこでも入手できるものだが、中世のヨーロッパでは大変な貴重品。あのコロンブスやマゼランの大冒険も、もとをといえば〝ペパー探し〟が発端だった。

ペパーは、コショウ科の多年生草で、インド南西部のマラバール地方が原産。主に、マレーシア連邦、スリランカ、インドネシア、ボルネオ、インドなどが主産地として知られているが、昭和八年、ブラジルへの日本人移民者が南米に持ち込み、栽培に成功。現在では、ブラジルも世界の生産量のうち大きなウエイトを占めるようになった。

ペパーには、ブラックペパー（黒胡椒）とホワイトペパー（白胡椒）があるが、もとはといえば、同じもの。

ただ、果実の採取時期が異なり、未熟な果実と外皮をつけたまま乾燥させたものを〝ブラックペパー〟、完全に熟した実を水に浸し、外皮をとり除いたあと乾燥させたものを〝ホワイトペパー〟と呼んでいる。

広く世界中で愛され

強い辛味、爽やかな香り

ちなみに日本では、ペパーのことを「胡椒」というが、これは中国から伝わったことは。

漢の時代、西方からシルクロードを経て伝来し、胡（西域のことで外国の意）の椒（ハジカミといい、山椒のように ヒリヒリ刺激するの意）と名付けられ、そのまま日本名になっている。

ペパーの主成分は、ピペリンとその立体異性体であるシアビシン等で、この含有量の多少で辛味の強さが決まる。

ペパーに含まれるピペリンは、精油中に溶けているか、乳化状態。これが、結晶状になると、辛味を感じなくなる。だから、長いこと貯蔵されたペパーは辛味が弱くなってしまう。

ペパーには、辛味のほかに、香味としての特長も欠かせない。その芳香成分は、主に外皮に含まれているそのため、外皮をとり除いたホワイトペパーの方が、ブラックペパーよりもマイルド。官能的にも約四分の一の強さしかないといわれている。

★ワンポイント アドバイス★

ペパーは、世界各国で用いられ、甘いフレーバーを持つ食品以外、ほとんどの料理にマッチする。

ペパーの強烈な辛味と爽やかな芳香を味わう肉料理には、ブラックペパーの荒挽きや粉末を。スープや、魚、ピクルスに原形（ホウル）のまま使えば、スパイシーな芳香を楽しめる。

逆に、フランス料理のホワイトソースやポタージュに、白身の魚料理には、マイルドで、辛味感の弱いホワイトペパーを。

また、ブラックペパーの芳香性を際立たせる際には、料理の仕上段階で加え、矯臭効果が目的の時は、下ごしらえ時に加えると良い。

（資料提供 ライオン家庭科学研究所）

試写室

この子を残して

昭和二十六年、二人の幼な子を残して、四十三才でこの世を去った、永井隆博士が、死の病床で綴った、同名の記録の映画化。

監督は、「二十四の瞳」「喜びも悲しみも幾歳月」「楢山節考」、最近作では「衝動殺人・息子よ」「父よ母よ！」を手がけ、人間への愛情を訴えつづける木下恵介。

脚本は、日常生活の中の内面のドラマを鋭利に描き出す、山田太一、と木下恵介。

撮影は、科学的なキャメラ・テクニックを駆使。重厚な画面作りを得意とする岡崎宏三。

木下作品では、初めての試みである特撮では、第一人者である成田亨。

また、この映画の製作には、映画史上初めての試みとして、佐保市針尾に、約二万平方㍍の広大な土地を借用。当時の長崎の町を再現。原爆によって、徹底的に破壊された状態をリアルに展開している。

この映画は、長崎の原爆投下

原爆の長崎を再現

永井博士の〝死の記録〟

キャストは、主人公の永井隆博士に加藤剛、妻緑に十朱幸代。その母ツモに淡島千景、現在の息子誠一に山口崇。緑の妹に神崎愛、緑の義妹に大竹しのぶ。永井博士を助ける看護婦に麻丘めぐみ、と個性的な出演陣だ。

〈A&K言いたい放談〉

A…五十八年度の「防衛白書」が発表された。それによると、陸・海・空軍ともに強化すべく方向に向いている。

K…日本が世界で唯一の被爆国で、第二次大戦でのヒロシマ・ナガサキの惨劇をみんな忘れてしまったのだろうか。

A…のど元過ぎれば熱さを忘れるというのだろうが、絶対に忘れてはいけない事なのだ。

K…そういった意味からも、この映画は、戦争を知らない時代に育った若い人たちに是非、観てほしいものだと思う。

A…テレビやマンガ雑誌で、簡単に人を殺すシーンが出て来る。人が人の命を奪うということがどういう事なのか…命の尊さが軽んじられる風潮も、われわれは考えなければならない。

K…ローマ法王の平和のアピールの中に「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」ということばがあるが、自分を二人の人間と思うなら、人間の命を粗末には出来ない…。

A…木下監督の戦争への思いもそこだと思う。二度と戦争はイヤだということ。永井博士も子供たちに〝最後の二人になっても、戦争絶対反対と叫び通してくれ〟という言葉を残している。映画の意図はそこにある。

（松竹映画　九月十七日全国一斉公開）

恐ろしい突然変異

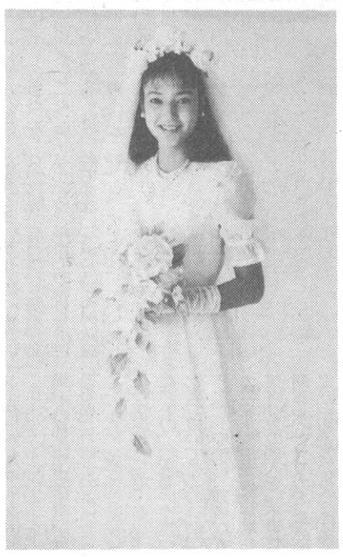
〝有害無益〟の着色料も

様子がすぐ分る。ガンも、すぐではないが本人にその症状が現われるが、遺伝毒性は自分、子供でなく、数代後の子孫になってやっと症状が現われるので、理解しにくい部分がある」という吉田教授。

美容

嫁ぐ日までの準備

品位と優雅さをこめて



結婚式の主役はなんといっても花嫁です。「ういういしさを失わず、しかも品位と優雅さをこめて」—結婚式という人生最良の日をベストコンディションで迎えるためのお手入れ法は—

婚約から結婚式までのハッピーな気分の一方で、新居の準備、式の段取り、新婚旅行先の決定など忙しいものです。

忙しいと肌の状態が不安定になりやすいので、ふだん使っている粧品よりもマイルドなタイプを選びましょう。

三カ月前から毎週一回のマッサージ、パックなどのお手入れをスタートさせます。顔、えり足、手、足などもお風呂から上ってテレビを見ている時間などを利用し習慣づけると苦になりません。

手はエンゲージリングの交換などで目立つ部分。指先をつまんだり、指の両側を押さえることで、血行をよくし、指をより美しく見せます。ボディーマッサージを美容室で定期的に試みるのも、疲れがとれ全身美容として効果的です。

二カ月前。ヘアスタイルの相談を美容室で。いよいよリハーサルになります。この時期までに衣装を選び、それに合わせてヘアスタイルを決めます。結婚式の当日は、クイックチェンジしなければならないので、髪型はシンプルなスタイルにし、むしろ髪飾りをアクセントに使えばうまくいくでしょう。

もちろんマッサージ、パックでの素肌のお手入れは続けてください。

一カ月前。顔そりをしたことのない方は、かみそりまけしないよう練習してみます。

二〜三週間前にはパーマをかけましょう。直前にかけるよりもヘアスタイルが顔になじみやすいからです。

パーマをかけたあと、必要なら少々脱色するとか、ヘアカラーで染めている場合は、その修正もしなければなりません。

和装のかつら合わせも、式場によって違いますが、だいたいこの頃に。

さらにマニキュアを塗る練習も始めます。

一週間前は、手足のむだ毛の脱色をし、美容室でフェーシャル、ボディーのマッサージをうけてはいかが。

三日前に顔そり。

前日。シャンプー、手足のマニキュア。これはうすいピンクかカラレスを。持ち物の点検。結婚式は意外に重労働ですので十分睡眠をとってください。

少しぜい沢でも美容室でエステティック、ボディーマッサージ、ヘアの手入れなどスケジュールを組んでもらえば、肌は目立ってきれいになります。

さて当日です。メーキャップは素肌の美しさを生かしたナチュラルなもので。結婚式場が広いとついオーバーなアイメークなどになりがちですが、ひかえ目に。

メーキャップは肌色を明るくし、ほお紅をつけると、格式のある着物姿によりふさわしいものです。

またいつまでも思い出に残る結婚写真は、あわただしい当日よりも、リハーサルを兼ねて前もって撮る人も多いとか。これならゆっくりメーキャップ、着付けをできるからです。

（資料提供　資生堂）

おんなの昭和史など

神奈川県立婦人総合センター

神奈川県立婦人総合センターの催し◇九月十六日から三月三日まで、十回にわたり、神奈川女性アカデミー講座「おんなの昭和史」を開催する。

テーマは▽9月16日　昭和の開幕—金融恐慌と大陸進出▽9月30日暮らしの破綻—娘の身売り▽10月7日　立ち上った女たち—労働、反戦運動の中で▽10月21日　名作の中の女性像—野上弥生子、宮本百合子、佐多稲子著作から▽11月4日　ファッシズムの嵐—戦争への道▽11月18日男の意識、女の意識—小林多喜二をめぐる女たち▽12月2日軍国主義と母性—婦人組織の総合強化▽12月16日　抵抗に生きた夫婦像—明石順三と静枝の場合▽59年1月20日　最前線の女性—白衣の天使と呼ばれて▽2月3日　敗戦—新生の時代。時間は毎回午後一時半から、同センター（藤沢市江の島一の一の一）第一研修室で。講師は吉見周子、米田佐代子、加納実紀代、大塚喜代子氏ら女性史研究家。無料。

「古文書に親しもう」を次の日程で。

▽10月1日「古文書への誘い」浅井潤子＝国立史料館助教授＝▽8日「郷土とかかわりのある文人の俳句・和歌」高野修＝藤沢市文書館主査▽15日「岩本院の古文書について」下山治久＝法政大講師▽22日「古文書による宿場の生活」小松郁雄＝文化資料館主査▽29日「江戸時代の遊行上人」圭室文雄＝明治大学教授＝。無料。申込み・問い合わせは同センター生涯学習部（0466　27　2111　内線560〜562）

かあさん　よろこぶだろな

もれてもゆれても
ガスが止まる
マイセーフって　知ってる

ガスがもれたり
大きな地震がきたら
自動的に止まるわけか　初耳だな

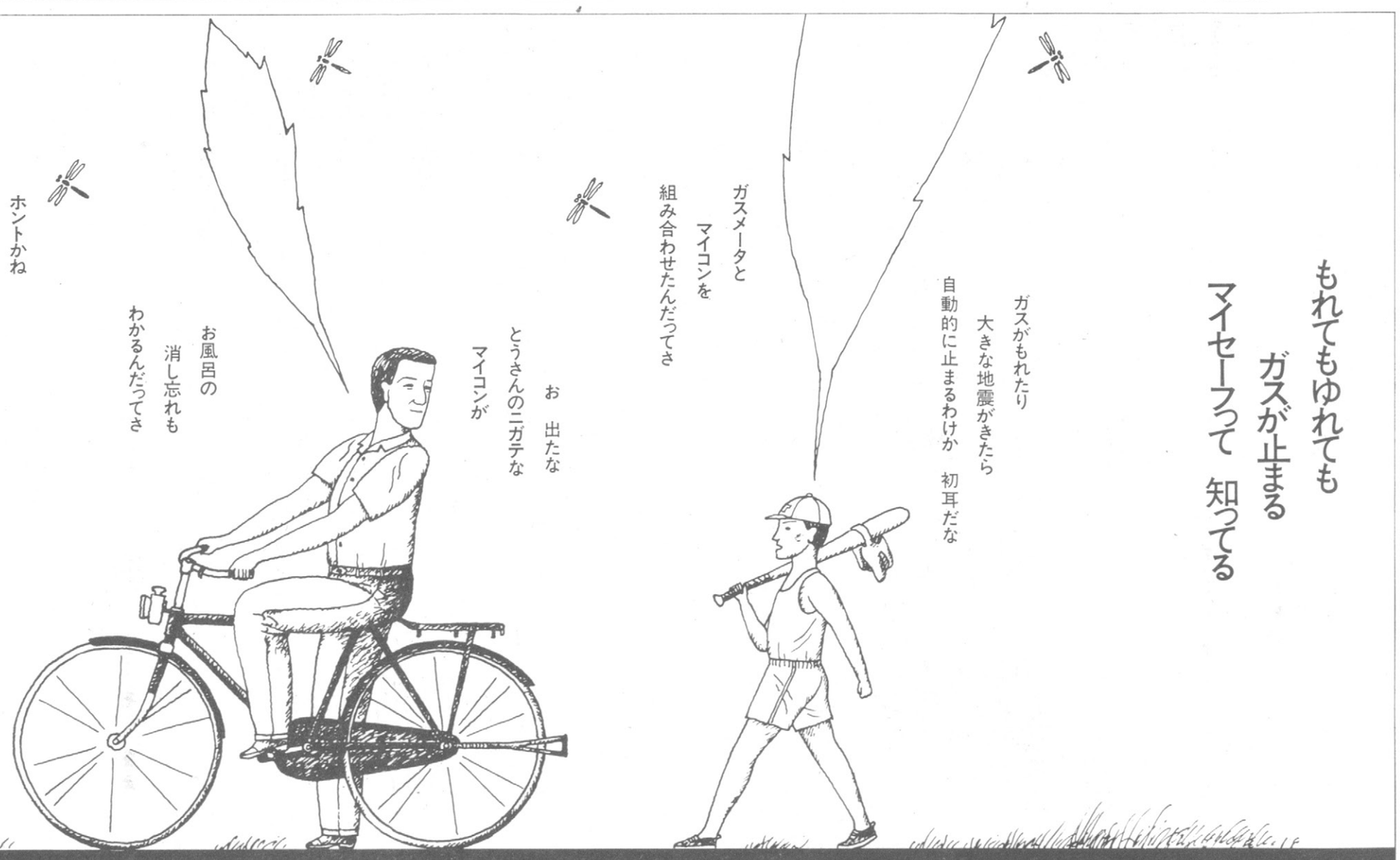
ガスメータと
マイコンを
組み合わせたんだってさ

お　出たな
とうさんのニガテな
マイコンが

お風呂の
消し忘れも
わかるんだってさ

ホントかね
それじゃもう
ガス事故なんて
起こりようがないな

マイセーフなら
かあさんも安心して
ガスを使えるんじゃない



my life, my gas.
東京ガス

マイセーフ（感震器付）／リース料金390円（月額）※都市ガス警報器、CO警報器（10月発売予定）はオプションで連動できます。お問い合わせは、お近くの東京ガスへ。